

水上瀧太郎全集 四卷

精興社印刷 板倉製本

昭和十五年十一月五日印刷
昭和十五年十一月十日發行

水上瀧太郎全集 四卷

著者 阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行者 岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

目次

大阪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一

大阪の宿・・・・・・・・・・・・・・・・三

後記・・・・・・・・・・・・・・・・一

大阪

大阪の停車場近い宿屋の三階の一室に、三田は疲れた體を投出した。薄暗い、切立てたやうな急な梯子段を上つた爲めに、上り切ると俄に骨身がゆるんでしまつた。

西向の窓をあけて見ると、靄とも霧ともつかない十一月の夕空が、近々と迫つて來た。目の下の家々の屋根の向ふに、平べつたく幅を取つて、黒ずんだ停車場の屋根が見え、その邊から夥しく煤煙を空に吐いて居た。家々の燈火と、賣藥の廣告塔の強い電光が、附近一帶に流れわたつて居た。汽笛を空に震はして、汽車が東に向つて出て行つた。

彼にとつて、大阪は今日迄縁も由縁ゆかりも無い所だつた。中學の生徒だつた頃、博覽會を見に來たのが、後にも前まへにもたつた一度だつた。長い月日がたつたので、友達と一緒に乗つたウオオタア・シユウトと、堀の深いお城の外は、何ひとつ覺えて居ない。

子供の頃夢中になつた繪本の感化か、生來さういふ性分なのか、しんねりむつとり底意地悪く

天下をとつた徳川家康が大嫌ひで、眞田幸村を崇拜した爲めに、お城に對しては感慨が深かつたが、何處に行つてもせせこましく、贅六そのもののやうな町の有様は、決して懐しい感じを起させなかつた。

今日になつても、彼は贅六が嫌ひだつた。贅六といふ言葉の屬性であるところの我利々々貪慾吝嗇に、まのあたり取圍まれて、これからさき幾年間暮すのだらうと考へた時は、つくづく月給取の身の上をはかなんだ。學校の寄宿舎に居た時代の知つた顔も、少しはあるにはあるのだつたが、概して純粹の大阪人には知己が無かつた。學生仲間でも、どういふものか他の學生との交際つきあひはうとく、「四字削除」のやうに、一かたまりになつて居るのが、大阪から來る連中の特色だつた。

朝も晝も晩も、食事の時間が近づくと、未だ食堂の大扉ちほどの開あかないうちから、手ん手に箸箱を持つて、拳骨でその扉を叩いたり、足で蹴つたりしながら、

「おい、あける、時間やぜ。」

「あけんかい、阿呆。早うあけたらえ、やないか。」

聲を揃へてわめきながら、口汚く賄まの給仕おとを罵るのがおきまりだつた。

「ちえつ、又浪花俱樂部が騒いでやがら。」

「贅六黙れ。」

食堂に近い室々の學生は、義憤を發して怒鳴つた。勿論三田もその一人だつた。

そんな事を思ひ出せば出す程、大阪は頼り無い所だつた。數年前外國へ行く時に感じたよりも、もつと心寂しかつた。

「何しろ酒は本場だからね、こいつが第一楽しみだよ。」

持つて生れた負惜みをいひながら、腹の中では、東京を離れる事が、卑怯未練になさげなかつた。

一の一

その朝、三田は手鞆をぶらさげて改札口を出た。旅人宿や小料理屋、名物岩おこしなどを賣る店の、雑然と並んで居る驛前の廣場には、むかしの記憶が蘇つて來たが、行く先の方角さへ知らない身には、親み難い土地だと思ひ込んで居る爲めか、軽い不安が胸を打つて止まなかつた。

何時からさうなつたのか自分でも知らないのだが、三田は人力車に乗るのが、形の上からも心持の上からも、妙に羞しくて嫌だつた。その爲めに、右に行くのか左に行くのかも知らない癖に、

電車道迄歩いた。

「道修町（ドーシューまち）に行くにはこれに乗ればいゝのですか。」
折よく来た電車の踏段に片足かけないばかりにして訊いた。

「何だッ。」

「道修町に行き度いのですが。」

「何處だッ。——早せんと動きまつせ。」

チンチンと合圖をすると、そのまゝ三田を取残して行つてしまつた。

「旦那、行きましよか。」

お上りだ^{の上}と見てとつて車夫^{くるまや}が、小走りに驅けて来て、三田の當惑した顔を覗き込んだ。

「よし、行つてくれ。道修町だ。」

爲方が無いやと思ひながら、既に梶棒を下した人力車に乗つてしまつた。

車夫はげんな顔をして、棒立に立つてゐる。

「道修町だよ。道修町つていふのかしら。」

東京と違つて、大概の町は町とは呼ばないと聞嚙つてゐたのだつた。

相手も困つた風に首をひねつた。

「道修町さ。道は道、修は修身の修——かういふ字さ。」

彼は空中に大きく字を書いてみせた。

「あゝ道修町(ドシヨーマチ)だつか。」

車夫は、なんのこつたといつた風な、人を馬鹿にした調子でいひ捨てると、直さま梶棒の中に身を入れて驅出した。

「なんだ、呑込の悪い奴だな。勝手に道修町(ドシヨーマチ)なんて訛つて置きやあがつて。」

三田は一切の大阪人に對して反感を持つて苦り切つた。

車夫の驅方にさへ大阪の特徴を見出す事が出来た。東京の車夫のやうに、氣取つた驅方もせず、一定の歩調も無かつた。蟲のやうに小股に、只管がむしやらに驅けた。その狭い往來にも拘らず、無遠慮に速い。全く型に拘泥しない實利的の驅方だつた。彼は人力車に乗つて居るのが、愈々羞しくて堪まらなかつた。

橋を渡つて、又橋を渡つて、益々狭い通に入つたが、間も無く四角の古びた建物の前で止まつた。二十幾年か前、落成した當時は、大阪最初の煉瓦造で、近郷近在から辨當を持つて見に来た

といふ話を、東京を出る時古手の社員に聞かされて、さぞかし立派なものだらうと想像したが、今では煉瓦は崩れ、石は汚れて附近の新しい建物の真中に、廢屋のやうに見えたのである。

受附の子供に名刺を出して、支店長室に案内して貰つた。かねがね氣むづかしい人だと聞いてゐて、内心びくびくして居たが、旅鞆を提げて入つて行つた三田を見ると、直に宿屋の心配をして呉れた。

「さあ、獨身者だと差し當り下宿を探さなくてはならないが、その下宿が大阪には少いからね。」しきりに煙草を吸ひながら、首をひねつて居たが、社員の二三人を呼んで、曾てその人々が獨身時代に居た下宿屋に電話をかけさせて、空室を問合せて呉れた。あいにく心當りはみんなふさがつて居た。結局、停車場の近くの宿屋に、假に荷物を下して、明日は専門に下宿を探したらよからうといつて呉れた。三田は事務の引繼をうけて、その日から馴れない仕事に頭腦を悩まさなくてはならなかつた。

一の二

會社がひけてから、世話好らしい年とつた庶務係に案内されて、この三階の宿屋に落つく迄の

一日を彼はぼんやり想ひかへしてゐた。

「えゝ、宿帳をお願い致します。」

番頭がやつて来た。妙にわざとらしく引呼吸ひきいきでものをいふ若いのが、硯と帳面をさしつけた。

「永らく御逗留願へませうか、それとも明日あすにもお立ちでいらつしやいますで御座いませうか。」
「それがわからないんです。私は勤人あつちなんですが突然此方の支店に寄越されて、来るには来たが居所はなし、格好の下宿が見つかれば明日あしたにも引越したいが、さうでなければ止むを得ず四五日厄介になるかも知れない。」

三田は宿帳をつけ終つて、硯と共に押返した。

「えへゝゝ、恐れ入ります。いづれ東京から奥様も御出でになりますので……」

「冗談いつちやあいけない、獨身者なんだ。」

「えへゝゝ、御冗談を。」

番頭は二つ三つ頭を下げて出て行つた。

「何をいつてやがるんだ、面白くもない。」

三田は口の中で、馬鹿ツといひ度いのを堪へた。

番頭の足音が梯子段を下の方に消えると、入違つて忙しい足取りで、女中が御膳を運んで來た。

「旦那はん、御酒あがりまつか。」

「あゝ飲むよ。實は先に御湯に入れて貰ひ度かつたんだがなあ。」

「えらい濟まへんな。御風呂は只今ふさがつて居りますよつて。」

半分は廊下に出ながら、又忙しさうに梯子段を下りて行つた。

幅の廣い顔に白粉の厚い、銀杏返しぎんぎょうがへしの兩鬢を思ひ切つてふくらませた女中のお酌で酒を飲むよりは、獨酌に限ると思つて斷つたが、先方は承知しない。

「そんなに嫌はんとお酌させて貰ひまつさ。東京の奥さんに叱られるやうな女子おんなやおまへんさか
し。」

三田はぐいぐい飲んで、飯を濟ませた。

其日も全く暮れてしまつた。停車場を中心にした燈火の町は一層光り輝いて、遙に澄んだ大空に反映して居た。彼は數年間外國を經廻へいぐわいつて居た間に屢々經驗した郷愁に似た感じを、その夜の景色の中に浮べて居た。

「御風呂があきました。おもての廣間に、お客さんが仰山來やはるさうにおますさかい、さつさ

とお入りにならんとうるさうおまつせ。」

三田は手拭を引つかむと、直に女中の後について出た。

湯殿の中は朦朧として、澤山の人間が入つた爲めに、腐つたやうな臭氣を立てた湯氣が、いっぱい籠つて居た。やめようかと思つたが、案内して來た女中の手前、今更三階迄引返す事も出ないで、忌々しい感じにわくわくしながら、やけに素裸になると、手荒く全身に湯を浴びて、石鹼と脂肪の玉になつて浮いてゐる湯の中に飛び込んだ。

暫時すると、入亂れた足音と話聲が近づいて、五六人の男が一時に侵入して來た。

「すいとる、すいとる。」

云ひながら、縵袍を脱ぎ、しやつを脱ぎ、股引を脱いで入つて來た。

「や、どつこいしよ。あゝいゝ氣持だ。矢張日本が一番氣樂だね。」

「さうさ。これでいゝ喉でも見つかりやあ尙更だぜ。」

大きな聲で笑ひながら、先客の三田を見て、その笑ひの仲間入をして貰ひ度い風だつた。

「みんな亞米利加から遙々女房を探しに來た連中なんです。」

その中の一人は、早くも三田に話かけた。

今朝神戸に上陸したが、今夜は大阪で一杯飲んで、明日は別れて各々の故郷に歸り、又來月の船で一緒に彼地に行くのだが、それ迄に女房を探すのだといふのであつた。

「君なんざあ御存じないでせうが、合衆國では働きさへすりやあ金はいくらでも入りませ。その癖、飲む博つ買ふで溜りつこはありやあしない。矢張女がなくちや眞當な根性でものは起りません。人間、女程難有いものはありませんからねハハハ……」

又しても高々と笑つたが、澤山の人間が動く度に動揺する爲め、湯氣の臭氣は愈々非道く、三田は胸が悪くなつて來た。

「どうかいゝ奥さんをお探しになるやうに祈ります。」

いひ殘して、彼は湯船を出た。

「サンキユウ、サア。」

頓狂な聲で、中の一人がこたへた。

三田は、湯に入つた爲めに、かへつて體が汚れたやうな氣がして、頭からざあざあ水をあびた。

三階に歸る途中、又五六人亞米利加歸りらしいのと、梯子段の真中で出喰でつくはした。

自分の室むには、ちやんと床が敷いてあつた。糊の堅い白い布かぢで完全に包まれた枕と夜着に安心して、彼は其の上に横になつた。

廊下を距てたおもて三階の廣間の方は、非道くざわついて居た。梯子段を上つたり下りたりする足音と一緒に、盃洗に盃の觸れる音が聞こえた。

東京を立つ前は、毎晩々々友達と飲み歩いて居たので、體を横にすると、流石に疲勞は遠慮なく襲つて來た。遠くに汽笛の音を聞きながら、彼は何時の間にかうとうとした。

誰かに起されたやうな氣がして、目が覺めたが、誰も其處には居なかつた。そのかはり、想おもひもかけない三味線が、多勢おほせの笑ひ聲にまじつて聞えて來た。

宿屋の三階で、三味線を弾いて騒ぐ奴が居ようとは、全く意外だつた。三田は、思はず知らず半身を起した。

やすきせんげんなのでたところ

しやにちざくらにとかみやま

調子はづれにうたふ男の聲に、無理に合せる三味線がしどろもどろになつて、五六人が出たら